

福井市立郷土歴史博物館所蔵『馬威し図』にみられる建築 — 福井城下の視的考察 その22 —

伊豆蔵 庫 喜*

A study on the building in the book 'UMAODOSHI-BYOBU' of the Fukui City History Museum — The sight of the Fukui castle town, part 22 —

Kouki Izukura

This paper deals with the appearance of the historic architectures, whose pictures are seen in the 'UMAODOSHI-BYOBU' owned by the Fukui City History Museum. I clarify that the architectures, such as 'Sakura-Gomon', Samurai-residences and the tradesmen's houses shows the reality of the late Edo period.

1. はじめに

本研究は幕末頃の福井城下の情景を視覚的に検討するものである。これまで『福井城旧景』¹⁾(以下、『旧景』とする)をもとに、城地や武家地の建築形態および周辺の景観について報告した²⁾。しかし、『旧景』は町人地を描いていないため、城下の中でも町人地の実態は明らかにできない。ところで、福井市立郷土歴史博物館には『旧景』と同じ頃の福井城下の様子を描いたとみられる『安政時代馬威し図』³⁾(以下、『馬威し図』とする)が所蔵されている。これには橋北の本町通りや橋南地区が描かれていて、『旧景』で明らかにできなかった町人地の様子を知ることができる。

本稿は、この『馬威し図』にみられる建物の様子を『旧景』や慶応年間(1865~67)の『福井御城下之図』⁴⁾と比較しながら検討する。

2. 『馬威し図』について

馬威しは、毎年正月14日に左義長神事として行われ、馬に乗った藩士が桜御門から城外に乗り出し、本町・呉服町を疾駆しながら柳御門を入れて城内に戻る福井藩の年中行事のひとつであった⁵⁾。『馬威し図』(図1)は、この様子を描いた六曲一双の屏風で、城内や城下の様子が詳しく描かれている。縁を除いた絵の大きさは、左隻・右隻ともに高さが1580mmで、長さは3576mmであり、1扇分の幅は596mmである。

この絵は昭和12年(1937)に菱川師福氏⁶⁾が93歳の時に描いたものである。しかし、図の端書に安政時代とあることから⁷⁾、彼が少年期頃の城下の様子を描いていることになる。福井城内の建物や武家屋敷の位置関係などは城下絵図と一致していて、絵の内容はかなり信憑性が高いと考えられる。右隻は九十九橋北詰めから本町通りまでの、福井城下の町人地が描かれている。一方、左隻は桜御門から鉄御門までの間にあった武家地が描かれている。

* 建設工学科 建築学専攻

図1 『安政時代馬威し図』(右隻)

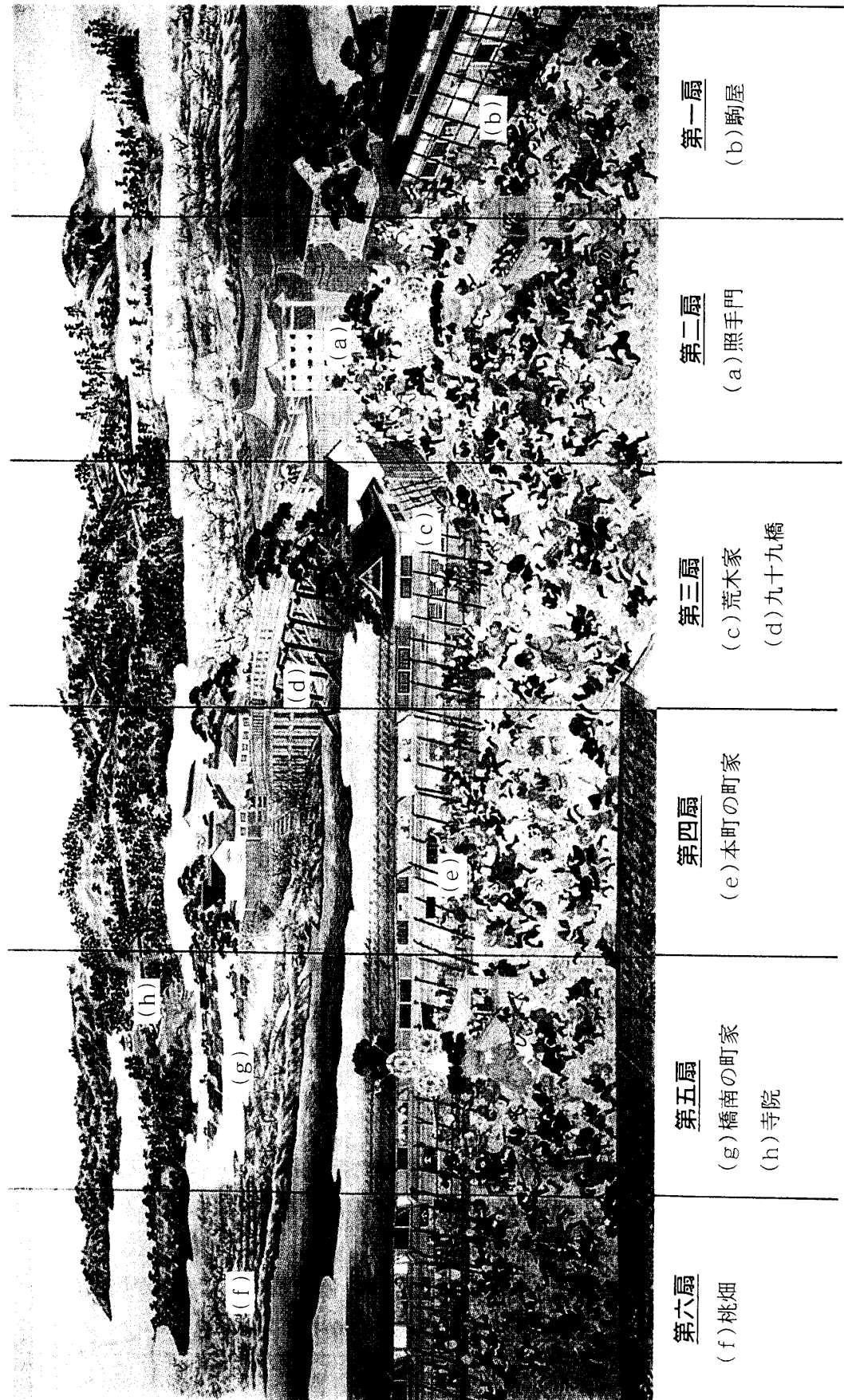
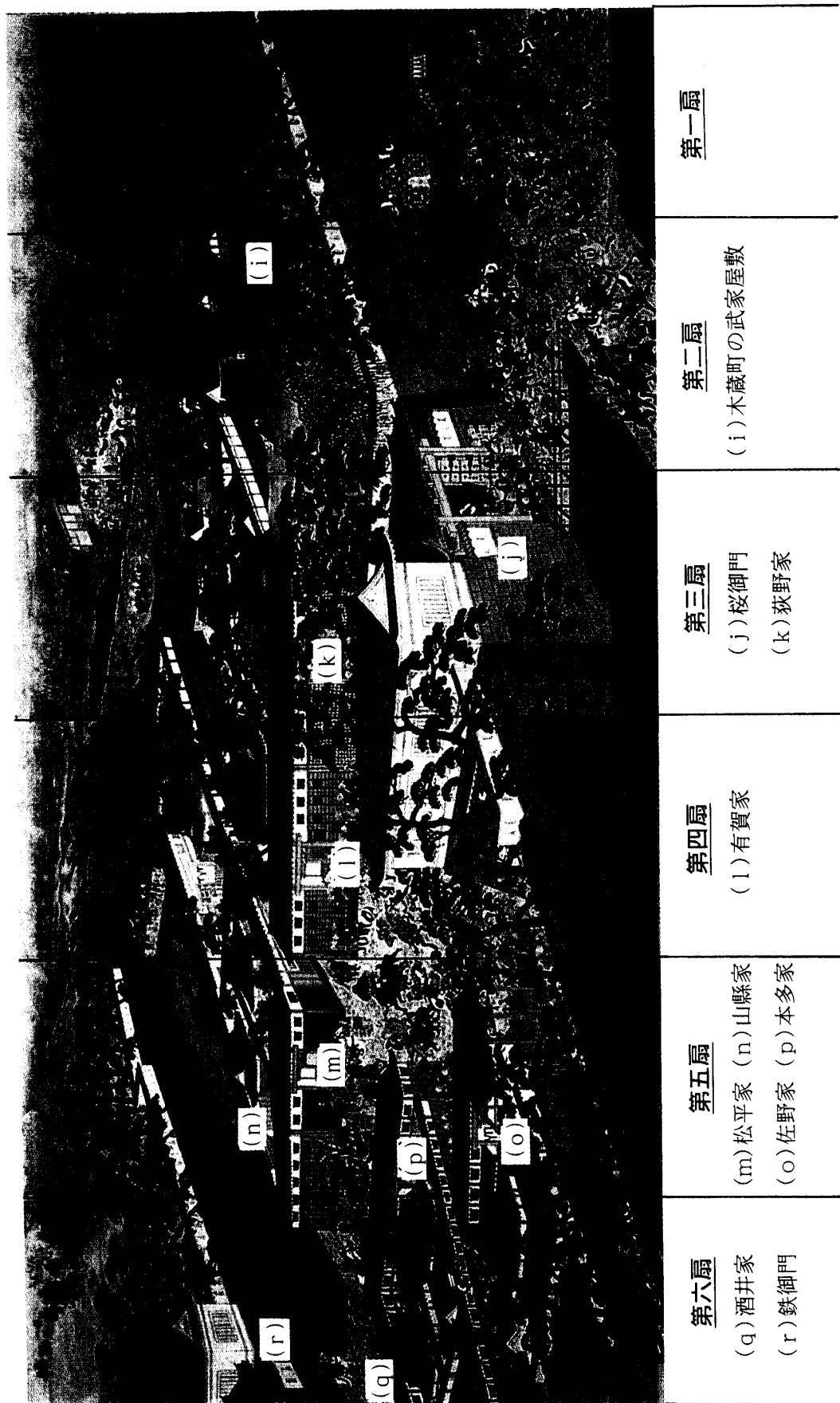


図1 『安政時代馬威し図』(左隻)



3. 『馬威し図』にみる建築

右隻・左隻の順に一扇ごとに描かれている建築について検討してみたい。ここでは、右隻・左隻とも右から左へ順に第一扇より第六扇までとする。

(1) 右隻

イ. 第一・二扇

第一扇と第二扇は九十九橋の北詰の様子を描いている。第二扇の中央にあるのが照手門(a)で、右手に高札場もみられる。この北詰めは越前国内諸方への里程の起点となっていたところで、ここから北の京町・呉服町には多くの商家が並び、北陸街道沿いの中心街であった。

照手門を少し北に進むと、右に駒屋(b)の屋敷がみられる。駒屋は福井藩の藩札発行の札所元締を務めていた旧家である⁸⁾。駒屋の表構えは、通りに面して長く延びた2階建ての間口9間以上の長屋と、その後方に塀の一部がみられる。長屋の屋根は切妻造で、茶褐色で塗られているが、置石はみられない。外壁は白漆喰壁、腰板張になっていて、1・2階ともに格子窓が付いている。

ちなみに、照手門の門扉が閉められているのは、『福井藩史話(上)』⁹⁾に「九十九橋北の方の門即ち照手御門は、際限なき雑踏を防ぐため当日々切にて往来を禁じた。」とあるように、馬威し当日は照手門を閉めての通行を禁じていたためであった。

ロ. 第三扇

画面中央の屋敷は、北陸街道と本町通りが交差する角地に建つ荒木家(c)である。こちらも通り沿いに白漆喰壁、腰板張の2階建ての長屋が建ち、その後方に土蔵がみられる。しかし、荒木家の長屋は駒屋ほど長くはない。表長屋の屋根は同じ茶褐色であるが、駒屋とは違って入母屋造である。

荒木家の後方にみえるのが、足羽川に架かる九十九橋(d)である。欄干や橋脚は奥方(橋南)が灰色、手前(橋北)が薄茶色で、橋の中央付近を境に左右で異なった表現がされていて、この橋の特徴である半石半木の様子は屏風からも窺える。

ハ. 第四・五・六扇

第四扇から第六扇に続いている中央の通りが、城下の中で最も中心であった本町通りである。通りには鉦や太鼓をもって馬を威している多くの町人が描かれている。町家の前には、馬除けの丸太の柵が建てられ、角々に太鼓小屋や左義長飾りが設けられている。さらに、2階の窓越しに馬威しを見物する人々もみられる。

通り沿いには町家(e)が10棟ほど並んでいる。これらの町家は表通りに面して建ち、隣家と軒を接している。屋根は切妻造で茶色に塗られ、上に細長い置石が載っている。間口は2間～5間前後で、軒は腕木で支えられている。2階は階高が低く、厨子2階とみられ、中央部分に格子窓が付く。2階壁面はほとんどが柱をみせる真壁造りで、両端に袖壁あるいは力板がみられ、壁は白あるいは薄い青色で塗られている。下屋庇は薄い板葺きとみられる。1階部分は入り口とその脇に格子があり、玄関先には屋号入りの暖簾が掛けられている。

本町通りの後方(南)には足羽川とその南岸に広がる桃畑(f)、さらに、画面の最上部には橋南の町家(g)や足羽山の山麓に点在する寺院(h)がみられる。

(1) 左隻

イ. 第一扇

左隻の第一扇と第二扇の上方には桜御門の南側、足羽川沿いの情景が描かれている。この辺りは藩の材木蔵があったことから木蔵町と呼ばれ、寄合席の仙石家(50人扶持)や番組の高橋家(150石)、鈴木家(100石)など上級・中級武家屋敷(i)があった¹⁰⁾。

武家屋敷の屋根のほとんどが切妻造で、密に接して描かれている。屋根の表現には、茶色で上に細長い石を置いたものや薄茶色で細長い線が棟と平行に描かれているもの、同じ茶色の屋根であるが、全面に細かいたて線が入っているものなどがみられる。

ロ. 第二・三扇

二扇目中央の堀は、城郭の西端部にあった4重目の堀で、この堀を境に武家地と町人地が分けられていた。堀沿い西側に桜御門(j)がある。この門は手前の平屋建ての表門と、奥の2階建ての櫓門からなる枡形門である。表門は中央に両開きの扉が付き、両脇は石垣が積まれ、屋根は灰色で示されている。櫓門は入母屋造で、屋根はやはり灰色である。2階の外壁は白漆喰壁で、壁面に武者窓が並んでいる。1階は中央が門口で、その両脇は石垣積みである。

桜御門の右手(南)に延びる石垣の上には白漆喰壁の土塀が建ち、その後方(東)に門の名称の由来となった桜¹¹⁾が確認できる。土塀の屋根は、表門や櫓門と同じ灰色である。対する右手(北)の石垣上は、松が植えられているだけで塀はみられない。

ハ. 第四・五扇

第四・五扇には、桜御門の東側から鉄御門までの間にあった上級武家屋敷が描かれている。城下図に照し合せると、第四扇、中央通りの南側にあるのが、右から荻野家(k)と有賀家(l)で、路地を挟んであるのが松平家(m)と山縣家(n)の各武家屋敷である。通りの手前(北側)は右から佐野家(o)・本多家(p)・酒井家(q)である。荻野家や有賀家、松平家は福井藩の高知席、佐野家は寄合席の家格をもつ重臣の屋敷である¹²⁾。

いずれの屋敷も通りに面して2階建ての長屋門を構え、周囲には塀が回っている。長屋と塀の屋根は灰色と茶色の2種類みられる。灰色の屋根は佐野家の長屋と塀、本多家と酒井家の塀にみられ、茶色の屋根は荻野家と有賀家、松平家などの長屋や塀である。長屋の外壁はいずれの屋敷も白漆喰壁で、上部に格子窓が等間隔に並び、腰下は左端の荻野家だけが海鼠壁で、残りはすべて腰板張りである。

これらの屋敷内(b～h)には御殿や土蔵がみられ、松などの樹木も描かれている。御殿の屋根は入母屋造で、色はほとんどが茶色である。土蔵の屋根は切妻造で、すべて茶褐色である。

『福井藩史話(上)』¹³⁾に「馬威の節は佐野長屋の二階が藩主御覧の席に宛てられ、明石・大谷・皆川杯は裏の塀の上に物見を拵へ其所にて見物した。」とあり、馬威しの際に佐野家長屋の2階が

藩主の席に宛てられていたことがわかる。この屏風でも、佐野家の長屋の2階に松平家の家紋である葵の紋入りの幕が張られていて、『福井藩史話(上)』の通り、ここが藩主の席になっていたことがわかる。

八. 第六扇

画面左端の堀は福井城の3重目の堀で、堀際にあるのが鉄御門(r)である。この門は武家地と城地の境界に置かれていた城門で、福井城の玄関口の門として重要であった。屏風には表門と櫓門の一部が描かれている。表門の柱や扉は灰色に彩色されていて、名の通り鉄板が張られていたと思われる。表門と櫓門の屋根は、桜御門と同じように灰色で描かれている。

4. 屋根表現について

以上、『馬威し図』にみられる建築についてみてきた。それらの屋根表現をみると、色は灰色・茶色・薄茶色・茶褐色の4種類があり、それにたて線やよこ線が表現されていたり、置石がみられたりする。これらをまとめたものが表1である。

表1 『馬威し図』にみられる屋根表現

色別	描法	建築名			葺き材	備考
		城地(外郭)	武家地(上・中級)	町人地		
灰色	たて線(実線)	鉄御門(表門、櫓門、土堀) 桜御門(表門、櫓門、土堀)	佐野家(長屋、堀) 本多家(堀) 酒井家(堀)	照手門 九十九橋の南側	石瓦葺き (笏谷石)	古写真で確認 軒丸瓦の表現あり
茶色	線なし		荻野家(長屋、御殿) 有賀家(長屋、御殿) 松平家(長屋、御殿) 山県家(長屋、御殿) 酒井家(長屋、御殿) 本多家(長屋、御殿)		柿葺きまたは 檜皮葺き	小口が黒色で 塗られている
	よこ線(破線)		木蔵町(武家屋敷)	本町通り(町家)	石置き	置石が載る
薄茶色	よこ線(実線)		荻野家(堀) 松平家(堀) 木蔵町(武家屋敷)	九十九橋の北側	板葺き	
	たて線(細線)		木蔵町(武家屋敷)		茅葺き	
茶褐色	たて線(実線)		荻野家(土蔵)	荒木家(長屋・土蔵) 駒屋(長屋) 高札場	赤瓦葺き	軒丸瓦の表現あり

(1) 灰色の屋根

灰色の屋根は、外郭の鉄御門と桜御門(図2)や武家地の佐野家の長屋などにみられる。いずれもたて線が描かれていて、軒丸瓦の表現もある。このうち、桜御門の屋根は史料¹⁴⁾から笏谷石が使われていたと判断できる。また、九十九橋の南側の笏谷石で造られている欄干や橋脚も同じ灰色である。

したがって、灰色は福井特産の笏谷石¹⁵⁾を示しており、桜御門などの灰色屋根は笏谷石瓦葺きであると判断できる。

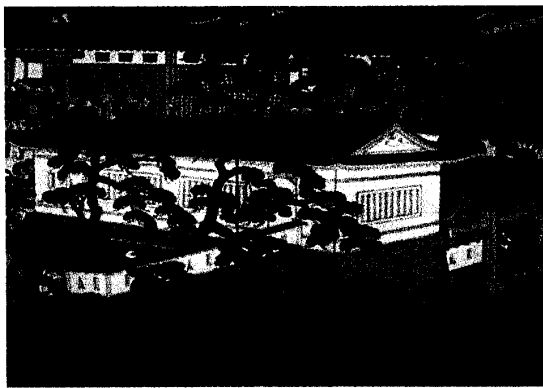


図2 石瓦葺き

正面の桜御門の屋根は(灰色・たて線入り)である。

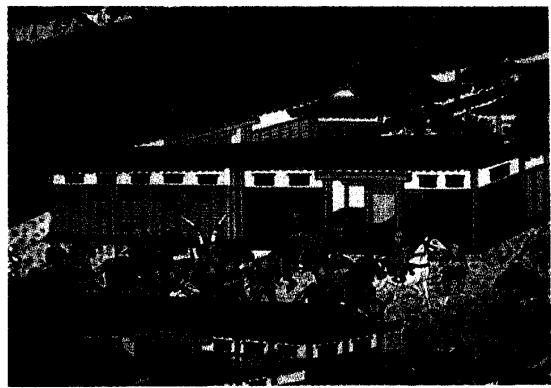


図3 柿葺きもしくは檜皮葺き

右側の長屋門は松平邸、左側の御殿と長屋門は山縣邸である。いずれ屋根も(茶色・線なし)である。

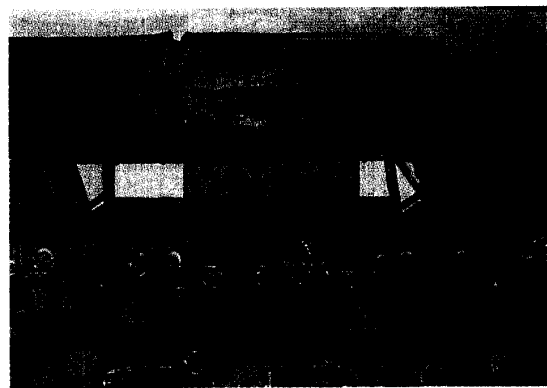


図4 石置屋根(町家)

町家の屋根は(茶色・置石あり)である。



図5 石置屋根(武家屋敷)

武家屋敷の屋根も同じく、(茶色・置石あり)である。



図6 板葺きと茅葺き

手前中央の屋根は(薄茶色・長板あり)で、
右端の屋根は(薄茶色・細線入り)である。



図7 赤瓦葺き

正面の荒木家の屋根は(茶褐色・たて線入り)である。

(図2～7は『安政時代馬威し図』より)

(2) 茶系の屋根

『馬威し図』では、茶系に塗られた屋根が一番多くみられる。茶系には茶色・薄茶色・茶褐色の3種類ある。

イ. 茶色屋根

茶色で線がない屋根は、松平家や山縣家(図3)など上級武家屋敷の御殿や長屋にみられ、小口が黒く塗られている。これらは、柿葺きもしくは檜皮葺きと考えられる。また、同じ茶色であるが、木蔵町の武家屋敷(図4)や本町通りの町家(図5)の屋根は、よこ方向に破線が入り細長い置石を載せている。この屋根は板葺きの石置屋根とみてよい。

ロ. 薄茶色屋根

薄茶色の屋根は、木蔵町の武家屋敷(図5・6参照)に多くみられ、よこ線が描かれているものと細いたて線のもので2通り確認できる。また、九十九橋の北側の木橋部分も薄茶色であることから、薄茶色は木など植物性の材料を表したものと判断できる。つまり、前者のよこ線入りの屋根は長板葺き、後者のたて線入りは茅葺きと考えたい。

ハ. 茶褐色屋根

上級武家屋敷の荻野家の土蔵や豪商の駒屋と荒木家(図7)の長屋の屋根は、茶褐色でたて線が描かれている。茶褐色の屋根は板葺きとも考えられるが、軒丸瓦が表現されているから瓦葺きとみるのが妥当で、色合いからみて越前特有の赤瓦葺き¹⁶⁾と判断したい。

5. おわりに

以上のように、福井市立郷土歴史博物館所蔵の『馬威し図』にみられる建築について検討した。昭和に入って描かれた屏風絵であるが、桜御門や鉄御門および城下の本町などの位置関係は幕末の城下図と一致しており、かなり実景に近い様子が描かれていること、建物の屋根表現は材料や葺き方の違いを克明に描き分けていることなどが指摘できた。また、『旧景』では明らかにできなかった町人地の町家の様子や武家屋敷内の建築構成も解明できた。すなわち、福井市立郷土歴史博物館所蔵の『馬威し図』も『旧景』と同様に幕末の福井城下を視的に考察する上で貴重な絵図史料のひとつといえる。

■謝辞

『馬威し図』の閲覧ならびに撮影に際しては、福井市立郷土歴史博物館の協力を戴きました。末尾ながら感謝申し上げます。

【註】

- 1) 松平宗紀氏所蔵『松平文庫』福井県立図書館保管
- 2) 伊豆蔵庫喜・吉田純一「福井城下の視的考察 1～21」日本建築学会大会・同北陸支部および福井工業大学研究紀要で報告している。(1995～2001)
- 3) 福井市立郷土歴史博物館所蔵『春嶽公記念文庫』
- 4) 註1と同じ、『福井御城下絵図』慶応年間(1865～67)
- 5) 森恒救『福井藩史話(上)』歴史図書社(1975.10) p196の左義長・馬威の模様(一)の項 参照
- 6) 菱川師福は、明治～大正期の絵師で、馬威しの図を得意としており、この絵は93歳の時の作品である。
左隻の端書に「福井松平藩之圖 九十三翁 菱川師福筆 □□印」とある。
- 7) 右隻の端書に「安政時代馬威之圖 九十三翁 菱川師福筆 □□印」とある。
- 8) 『稿本福井市史(上)』歴史図書社(1973.1) p657の札所の元締と役員の項に「藩札は札所にて発行し、荒木、駒屋の両家も戸締りせり」とある。
- 9) 註5掲載、『福井藩史話(上)』 p196の左義長・馬威の模様(一)の項
- 10) 家格や禄高については、鈴木準道著、舟沢茂樹校訂『福井藩史事典』歴史図書社(1980.11) p103を参考にした。
- 11) 註5掲載、『福井藩史話(上)』 p196に「大馬出の門は左右に土居にて植込樹木中に桜の古木ありしより一名桜の門と呼び、小馬出し門は左右の土居に柳を植込ありしより一名柳門と呼び、いずれも二重の門にて、屋根は福井城の如く笏谷石の石瓦を用いて壮嚴堅固を極めた」とある。
- 12) 註10 参照
- 13) 註5掲載、『福井藩史話(上)』 p200の左義長・馬威の模様(三)の項
- 14) 註11 参照
- 15) 笏谷石は足羽山から切り出される青みかかった凝灰岩である。笏谷石は越前特有のもので、現存する丸岡城天守は笏谷石の本瓦葺きである。
- 16) 赤瓦とは、瓦の表面に酸化鉄(紅柄)溶液を塗布して焼成するため、茶褐色あるいは暗赤褐色している瓦を指す。この赤瓦は越前特有のものである。

(平成13年12月3日受理)